

家村ゼミ展 2023

空間に、

自然光だけで、

日高理恵子の絵画を置く



主催：多摩美術大学 八王子キャンパス アートテークギャラリー（〒182-8585 東京都八王子市緑区2-1-1）
協賛：多摩美術大学芸術学術院 芸術学術院 芸術学術院 芸術学術院 芸術学術院 芸術学術院 芸術学術院 芸術学術院
実行委員：多摩美術大学 八王子キャンパス アートテークギャラリー 実行委員 実行委員 実行委員 実行委員 実行委員 実行委員
実行委員：鈴木理崇（写真家）、原山悠聖（デザイナー）、日高理恵子（画家）
実行委員：青木淳（建築家）、中尾拓雄（美術評論家）、中村竜治（建築家）
実行委員：北島幸樹、羽下菜々子
実行委員：鈴木理崇（写真家）、原山悠聖（デザイナー）、日高理恵子（画家）
実行委員：青木淳（建築家）、中尾拓雄（美術評論家）、中村竜治（建築家）
実行委員：北島幸樹、羽下菜々子

10/11 水 ~ 27 金

10:00-17:00

※日曜休館

多摩美術大学 八王子キャンパス
アートテークギャラリー

トークセッション1
日時：10月14日 土 13:00-15:00
会場：多摩美術大学アートテークギャラリー
登壇者：鈴木理崇（写真家）、原山悠聖（デザイナー）、日高理恵子（画家）

トークセッション2
日時：10月21日 土 13:00-15:00
会場：多摩美術大学アートテークギャラリー
登壇者：青木淳（建築家）、中尾拓雄（美術評論家）、中村竜治（建築家）

パフォーマンス：身体表現でみせる展示空間
日時：10月17日 木 13:30-10分程度
パフォーマンス：北島幸樹、羽下菜々子

www.iemuraseminar.com

- 【展覧会名】 家村ゼミ展 2023 「空間に、自然光だけで、日高理恵子の絵画を置く」
- 【会期】 2023年10月11日（水）～ 2023年10月27日（金）
10月15日（日）、10月22日（日）は休館日になります。
- 【開場時間】 10:00 ～ 17:00
- 【会場】 多摩美術大学 八王子キャンパス
アートテークギャラリー 101,102,103,104,105
〒192-0394 東京都八王子市鎌水 2-1723
- 【観覧料】 無料
- 【アクセス】 橋本駅より：北口 6 番乗り場より神奈川中央交通バス「多摩美術大学行」約 8 分
八王子駅より：南口 5 番乗り場より京王バス「急行多摩美術大学行」約 20 分
- 【イベント】 トークセッション：
- ①
日時：2023年10月14日（土） 13:00～15:00
場所：多摩美術大学アートテークギャラリー
登壇者：鈴木理策（写真家）、須山悠里（デザイナー）、日高理恵子（画家）
- ②
日時：2023年10月21日（土） 13:00～15:00
場所：多摩美術大学アートテークギャラリー
登壇者：青木 淳（建築家）、中尾拓哉（美術評論家）、中村竜治（建築家）
- パフォーマンス：
「身体表現でみせる展示空間」
日時：2023年10月17日（火） 13:30～ （10分程度）
場所：多摩美術大学アートテークギャラリー
パフォーマー：北畠華瑠南、羽下菜々子

1. 「家村ゼミ展」とは

多摩美術大学美術学部芸術学科・家村ゼミは、制作を通して、作家・学生・教員、またその周辺との間で生起する試行錯誤全体を「家村ゼミ展」と呼んで来ました。「展」という言葉は入っているものの、それはできあがった展覧会そのものを指すのではなく、そこに向かって進む過程全体・運動体のことを指しています。つまり、「家村ゼミ展」とは、展覧会のあらかじめ完成形を決め、その実現を目指す従来型の「展覧会」ではなく、一種のアート・プロジェクトなのです。

2017年度以来、アート・プロジェクト「家村ゼミ展」は毎年1本ずつ、作家、そして学部3年と4年の学生たちと行われてきました。これまでに行われたのは、「高柳恵里×高山陽介×千葉正也」展、泉太郎の個展、「日高理恵子 村瀬恭子 吉澤美香—ドローイングから。」展、「金氏徹平のグッドベンチレーション —360°を超えて—」展、「今年は、村田朋泰。—ほし 星 ホシー—」、「中村竜治 展示室を展示」の6本です。会場は、2015年に八王子キャンパス内に設けられたアートテークギャラリー1階（約520平米、一部天井高9m）、3年前からは、建築家大石雅之が非常勤講師として加わり、建築的な試行も加わっています。

2. 「空間に、自然光だけで、日高理恵子の絵画を置く」について

昨年の展覧会「中村竜治 展示室を展示」は、アートテークギャラリー1階の4つの展示室（約520平米、一部天井高9m）に、市販の白い紐だけを使用し、会期中3回の紐の設え変更を公開で行い「展示室を展示」いたしました。「帯」「結界」「対角線」と中村竜治が名付けたそれぞれの設えは、鑑賞者に自主的な「観察」をうながし、鑑賞者個々の目と身体で展示室を捉えなおすきっかけとなるような機会となりました。

今年は、この「中村竜治 展示室を展示」の延長線上の、その先を探るような展覧会を企画しております。アートテークギャラリーは、あらかじめ展示空間として設計された空間ではありますが、ガラス面が多く、外光が空間に影響をあたえるという特徴があります。この展示空間の特徴は、昨年の中村竜治の展覧会により、強く認識することとなりました。そこで、今年は、この展示室の特徴を生かし、4つの展示空間は照明を使用せず、自然光だけにし、日高理恵子の日本画、5点のみを展示いたします。

本展の特徴

1. 自然光だけの空間

アートテークギャラリー1階の4つの展示室は、約520平米の空間です。その空間を、人工照明を使用せず、自然光だけの状態にします。

2. 絵画作品が5点だけ

約520平米、一部天井高9mの、自然光だけの4つ空間には、日高理恵子の絵画を5点のみ置きます。空間に対し、日高理恵子の絵画の大きさは、物理的にとても小さなあり方です。絵画は、大きな余白と距離を所有することになるでしょう。

3. 環境の異なる4つの空間

4つの展示室はそれぞれで、自然光の入り方が異なります。中には自然光が直接入らない展示室もあります。くわえて、天候、時間、そして鑑賞者の気分などの影響を受け、環境の異なる4つの空間、そして5つの日高の絵画は、それぞれが常に揺れ動くものとなることでしょう。

4. 日高理恵子の5つの絵画、その特徴

・1983年の卒業制作の作品《樹》とそのドローイング。

《樹》は、「ひとつの出発点であると同時に、制作を続ける限り超えたいと思いつけるひとつの到達点でもある」と、日高自身が語る作品です。

・2002年から続く作品《空との距離》から、2013年の1点と2017年の2作品を展示します。2013年と2017年の作品は同じタイトル《空との距離》ですが、描き方は大きく異なります。2013年の作品は、「さまざまな天候、時間、光のもとで描いたドローイングからペインティングにしていく際、特定の状況でない、より普遍的な見え方に近づきたいと思って」描いた作品です。一方、2017年の作品については「『在る』という感覚、この感覚に近づくために、時間を限定したくないのですが、たとえば日が沈み、かすかな光のもとで見る樹のような、光による立体感とは違うものを描きたかった。かすかな光の方が、わたしにとっては枝や葉の存在感、その距離が測りしれないものに思えたので」と記されています。この変化を自然光の陰影の中で体感します。(引用は、いずれも『日高理恵子作品集』ヴァンジ彫刻庭園美術館 2017年。)

5. 目と身体が体験する場

本展は、自然光でみる日高理恵子の個展という位置付けの展覧会ではありません。光と影、空間、絵画、天気、時間、音、居合わせた人々の振る舞い、そういったものから個々の目と身体が体験・体感する場となることを企図した展覧会です。

6. トークイベント

今年は、昨年開催した「中村竜治 展示室を展示」の延長線上、さらにその先を探るような展覧会 という位置付けから、ひとつは、昨年と同じ登壇者の青木淳（建築家）、中尾拓哉（美術評論家）、中村竜治（建築家）による「空間から絵画への視点」、もうひとつは鈴木理策（写真家）、須山悠里（デザイナー）、日高理恵子（画家）による「日高理恵子の絵画から空間への視点」で語り合っていただきます。

7. パフォーマンス

絵画が置かれた空間でのパフォーマンスをゼミ展で初めて企画します。自然光の空間、絵画、そこに身体の動きが介入したとき、どのような変容が生まれるのかを試みます。

ゼミでの実験の様子



【主催】 多摩美術大学美術学部芸術学科 展覧会設計ゼミ（家村ゼミ）
担当教授：家村珠代
非常勤講師：大石雅之
助手：鍵谷 怜
TA (Teaching Assistant)：石田 彩
アルムナイ (alumni)：KIM Minjy
ゼミ生：岩田和花、大塚理紗子、川嶋守一、鬼頭明里、黄 静儀、羽下菜々子、
濱田里紗、藤本泰輔

【協力】 小山登美夫ギャラリー

【お問い合わせ】 公式 HP：<https://www.iemuraseminar.com/>
TEL：042-679-5627（多摩美術大学美術学部芸術学科研究室）
Email：tenrankai.sekkei@gmail.com（展覧会設計ゼミアドレス）

【SNS】 Twitter：@iemuraseminar
Instagram：@iemuraseminar